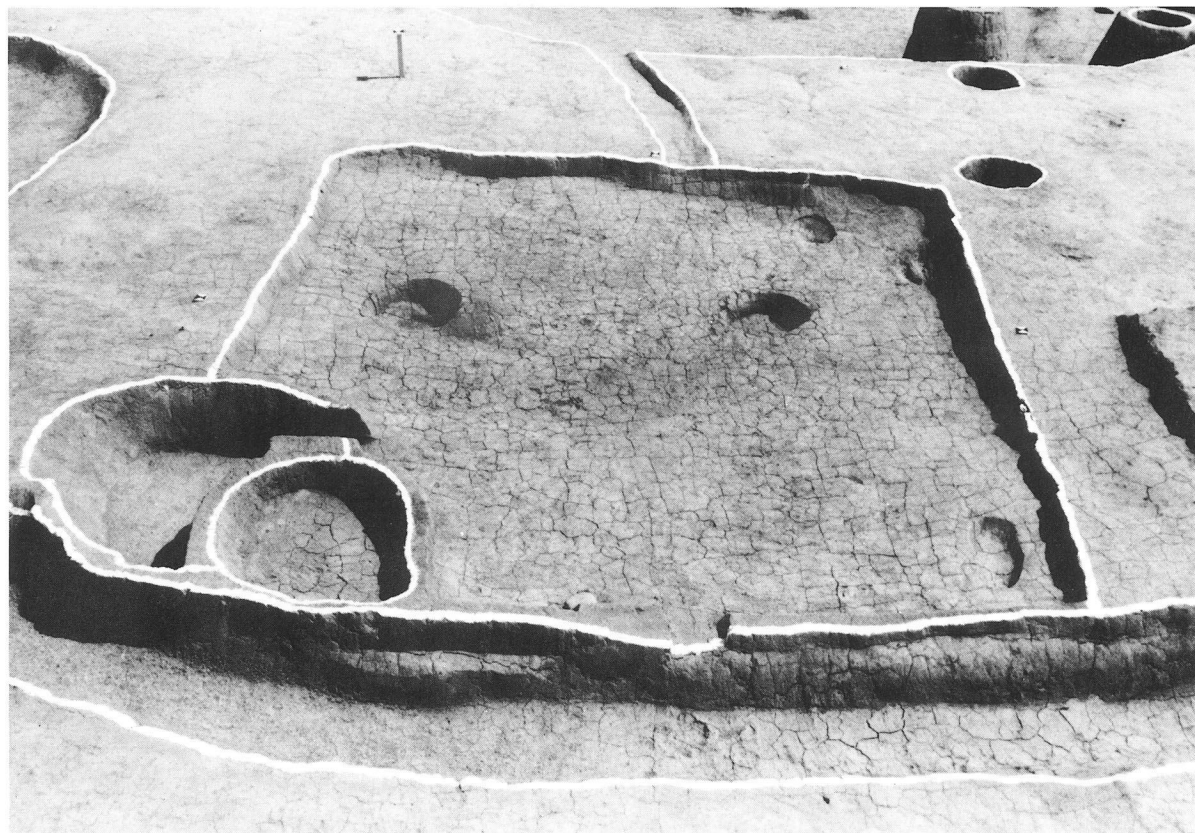


(1) SBNa11・13完掘状況



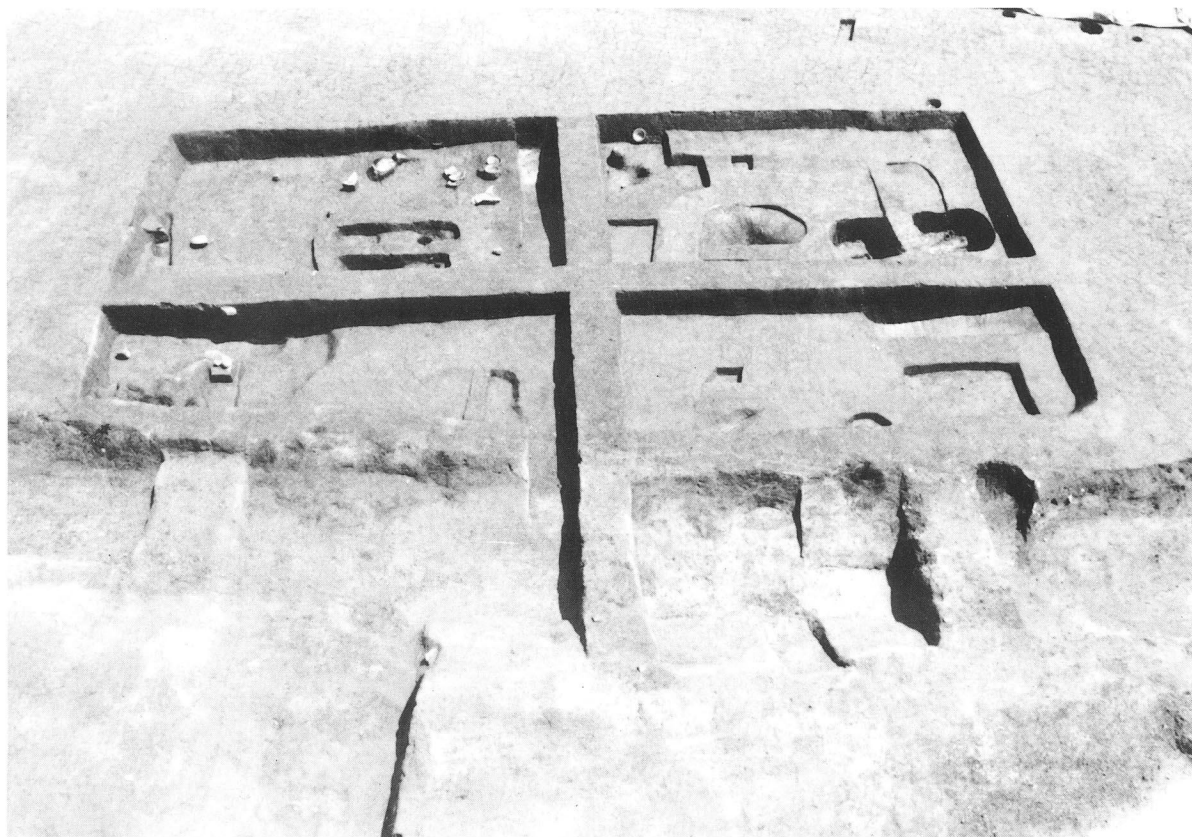
(2) SBNa11 小形仿製鏡出土状況



(1) SBNb09 完掘状況



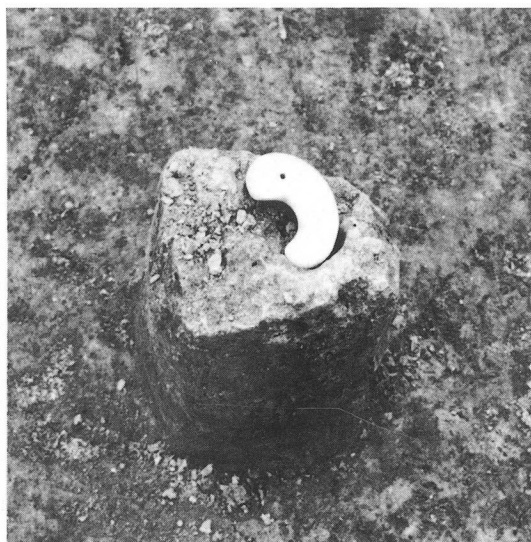
(2) SBNb09 遺物出土状況



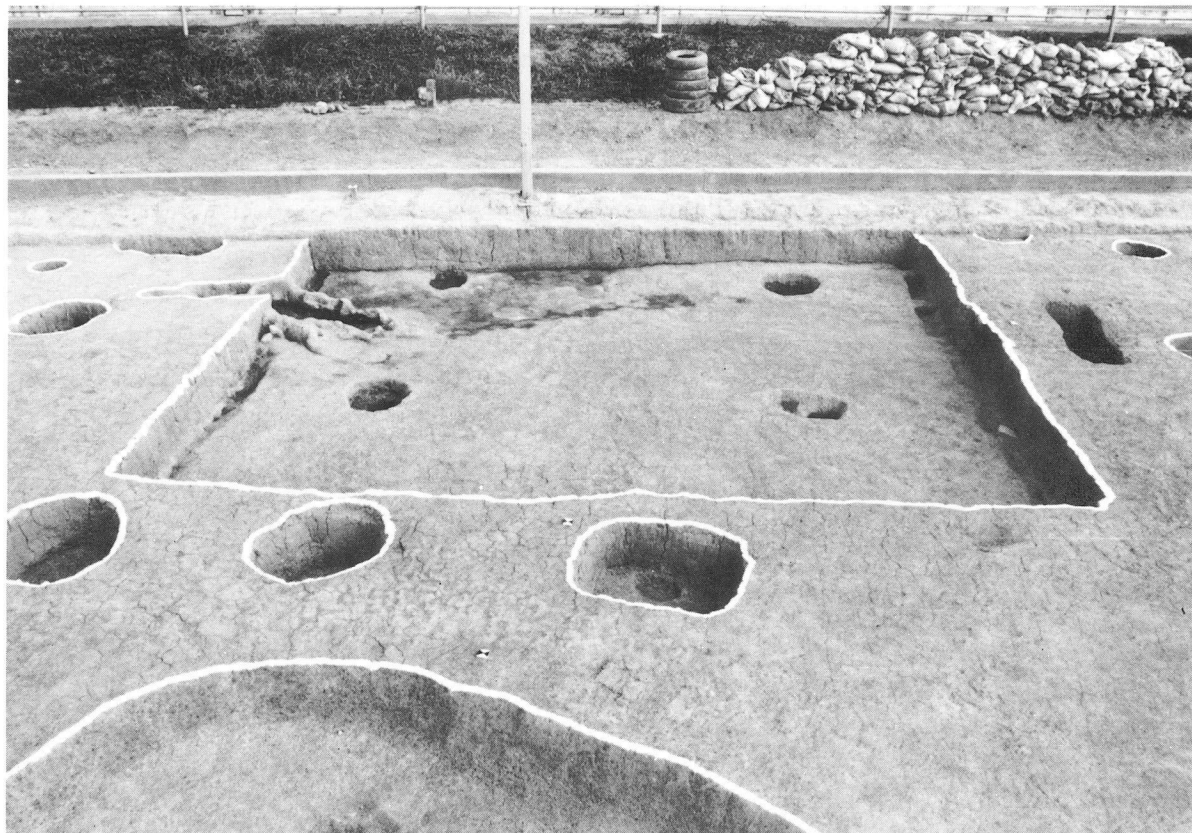
(1) SBNa07 全景



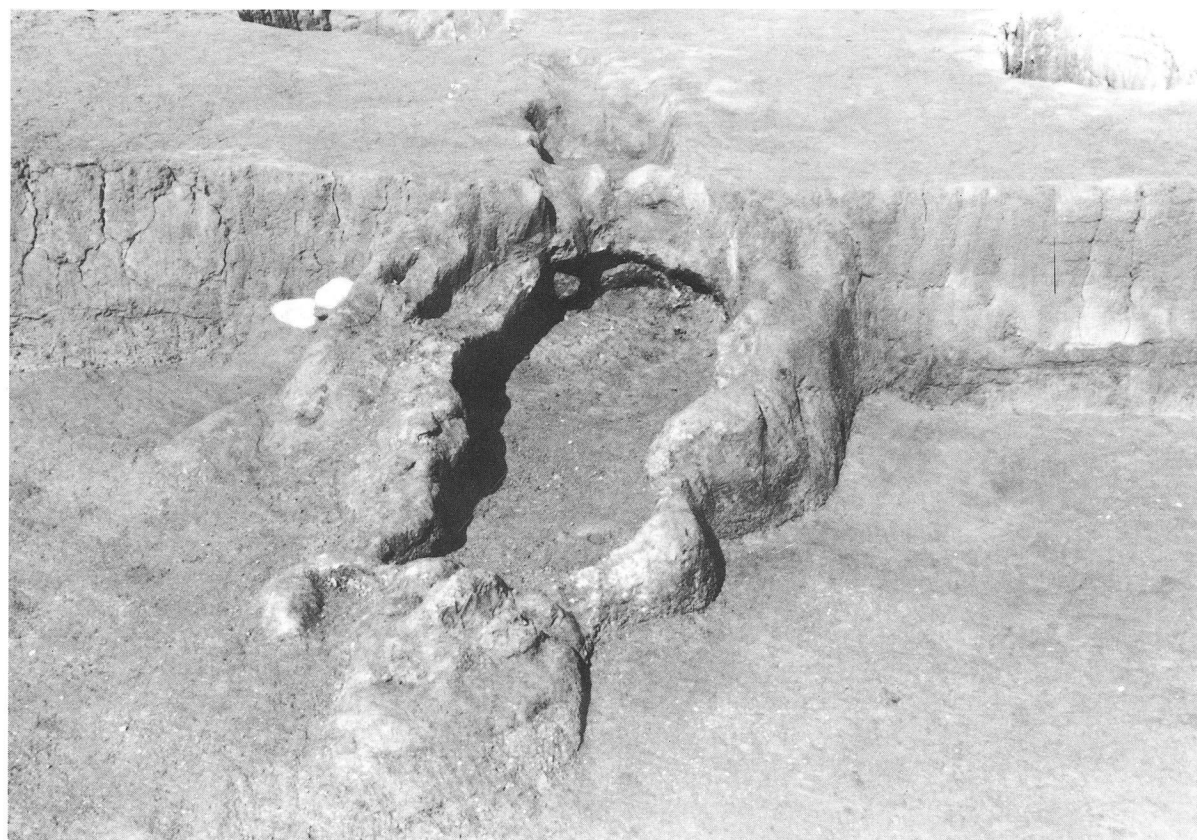
(2) SBNa07 遺物出土狀況



(3) SBNa07 勾玉出土狀況



(1) SBNa05 完掘状況



(2) SBNa05 カマド検出状況



(1) SBNa03 完掘状況



(2) SBNa03 カマド内遺物出土状況



(1) Na区建物柱穴検出状況



(2) SXNa01 大溝 (東より)



(1) Sa区 完掘状況



(2) SDSa03 遺物出土状況



(1) SBNe01 検出状況



(2) SXNa02 ^{あぶみ}鏡出土状況



(1) SXNa02 鋤柄等出土状況



(2) SXNa02 木器・土器出土状況



(1) SxNa02 竖杵出土状況



(2) SxNa02 木槌出土状況



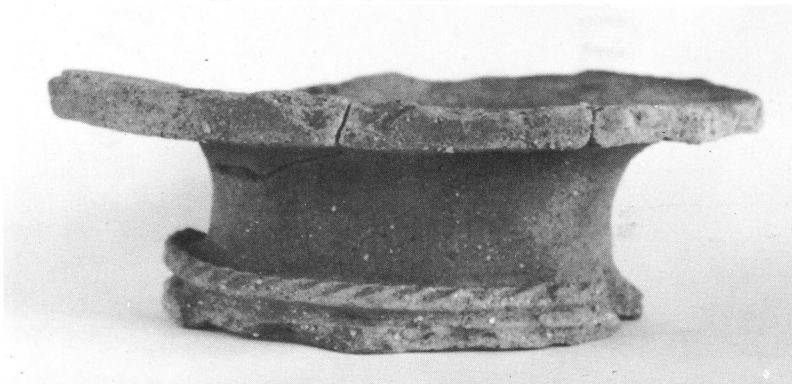
(1) SBNb04 出土土器



(2) SBNb04 出土土器



(3) SBNb05 出土土器



(4) SBNb05 出土土器



(5) SBNb05 出土土器

住居跡出土遺物



住居跡出土遺物

- (1) SBNb03 出土土器
- (2) SBNa11 出土土器
- (3) SBNb01 出土土器
- (4) SBNb01 出土土器
- (5) SBNb01 出土土器
- (6) SBNb01 出土土器
- (7) SBNb01 出土土器



1



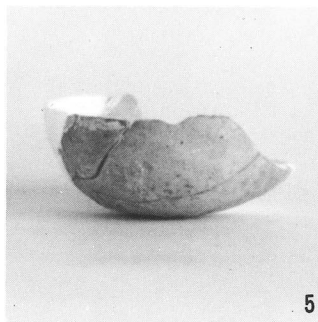
2



3



4



5



6



7



8

- (1) SBNa02 出土土器
- (2) SBNa02 出土土器
- (3) SBNa02 出土土器
- (4) SBNa02 出土土器
- (5) SBNb09 出土土器
- (6) SBNb09 出土土器
- (7) SBNa06 出土土器
- (8) SBNb07 出土土器

住居跡出土遺物



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

- (1) SBNb06 出土土器
- (2) SBNa07 出土土器
- (3) SBNa07 出土土器
- (4) SBNa07 出土土器
- (5) SBNa07 出土土器
- (6) SBNa07 出土土器
- (7) SBNa07 出土土器
- (8) SBNa05 出土土器
- (9) SBNa05 出土土器
- (10) SBNa03 出土土器

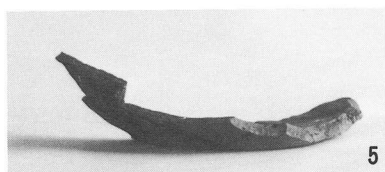
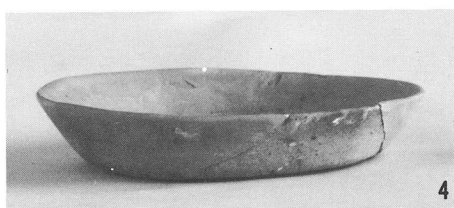
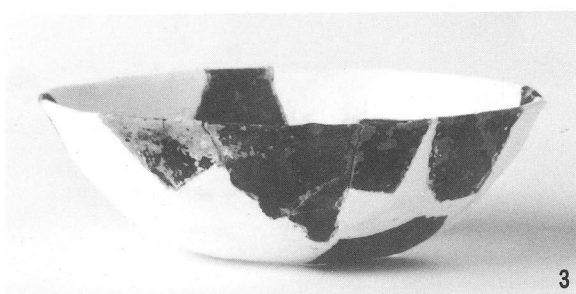
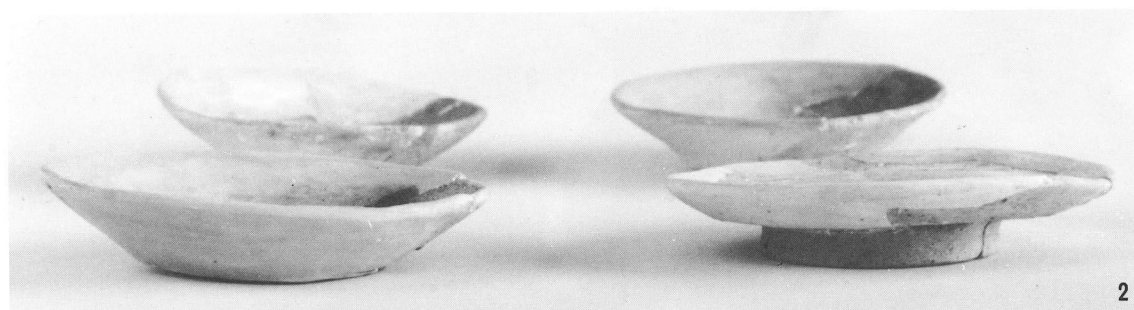


(1) 土師質土器



(2) 黒色土器

Sa区溝 (SDSa01・03出土遺物) その1



(1) 土師質碗 (2) 土師質皿 (3) 緑釉陶器碗
(4) 須恵器杯 (5) 須恵器杯 (6) 黒色土器碗



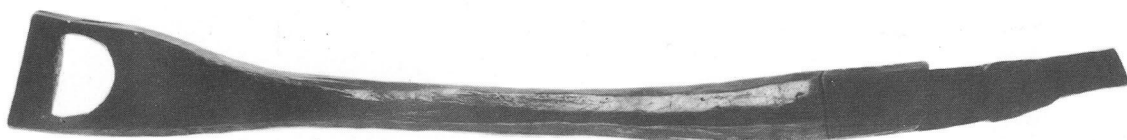
(1) Ne区出土須恵器



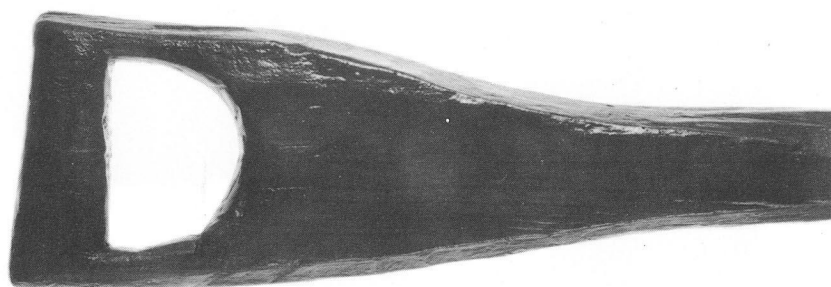
(2) Ne区出土土師器



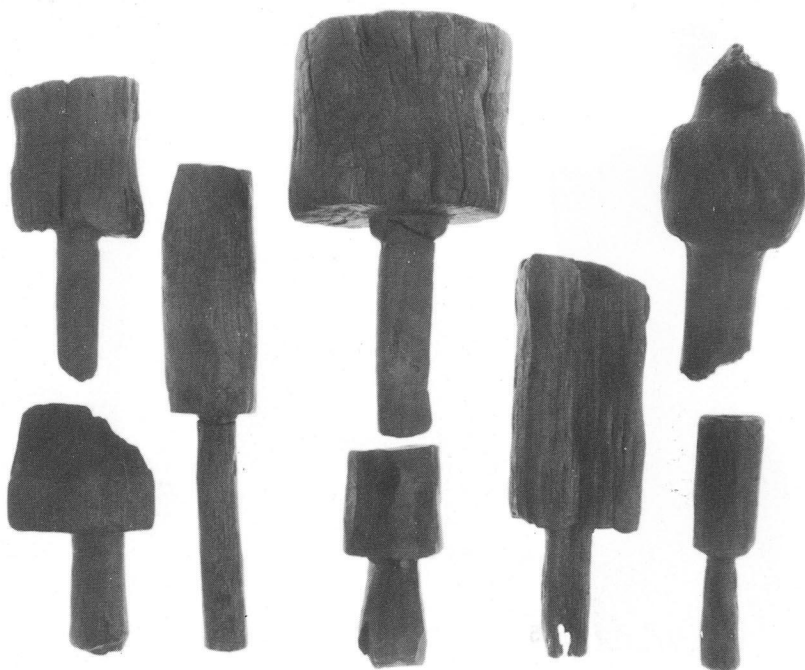
(3) 器種不明土師器 (SXNa02・0区)
 (4) 器種不明土師器 (SXNa02・0区)



1



2



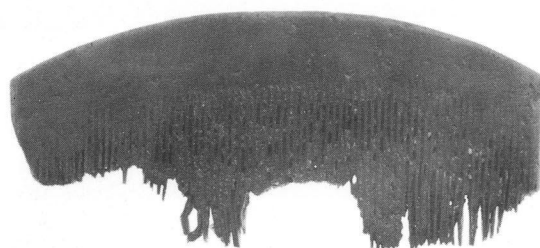
3



4

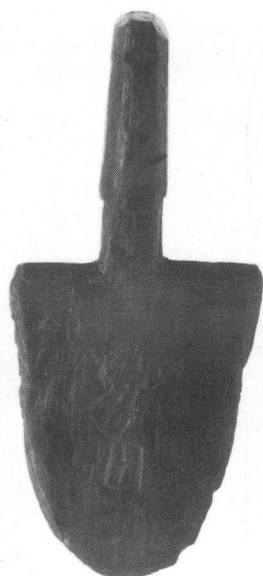


5



6

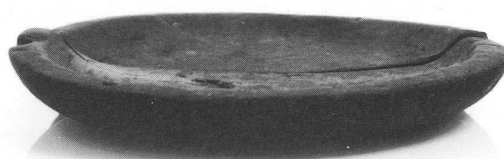
- (1) 鋤の柄
- (2) 鋤の柄部分拡大
- (3) 木槌
- (4) たてぎね 堅杵
- (5) 紡錘車
- (6) 櫛



1



2



3



4

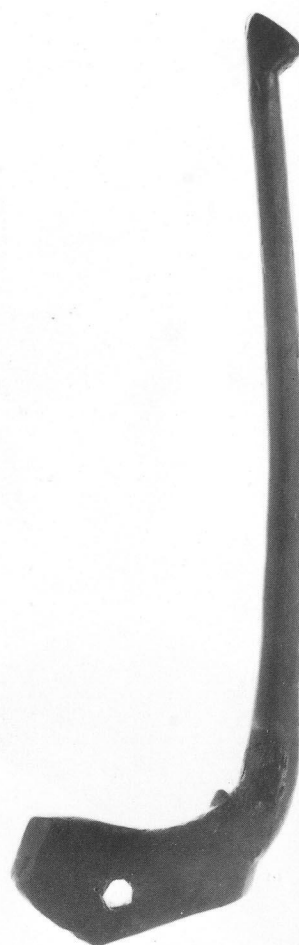


5

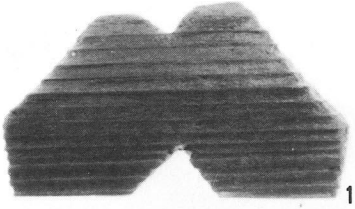


6

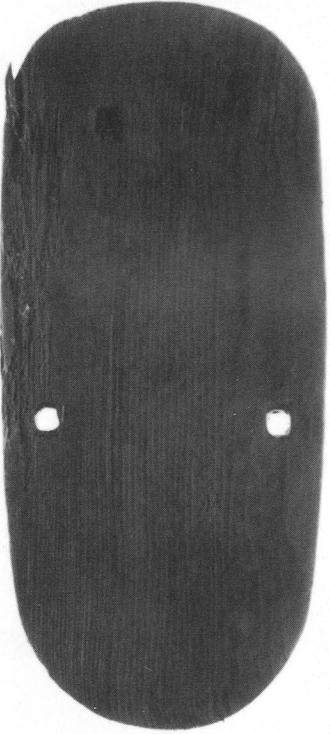
- (1) 鋤先 (5) 絡梁上部拡大
(2) 盆 (上から) (6) 不明木器
(3) 盆 (横から) (7) 不明木器
(4) 絡梁



7



2



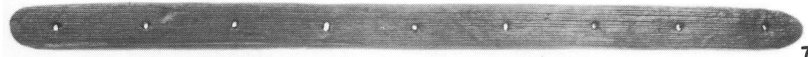
3



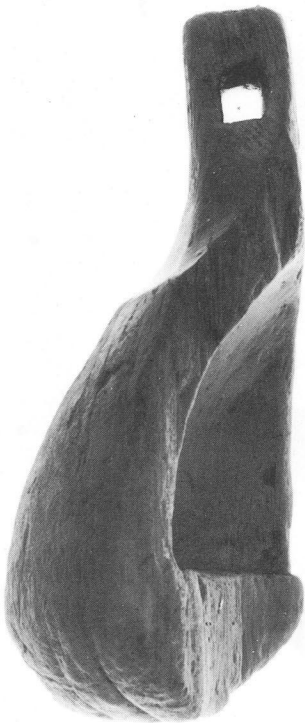
4



6



7

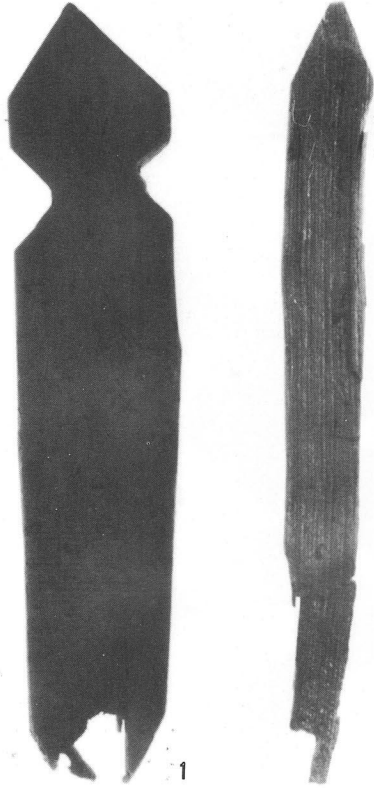


5



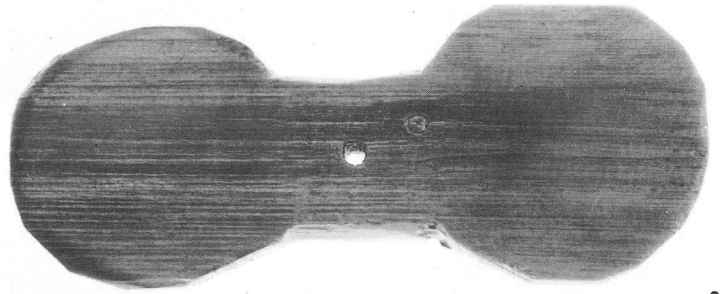
8

- (1) 琴柱
- (2) 舟形模造品
- (3) 下駄
- (4) 木錘
- (5) 鐙
- (6) 不明木器
- (7) 不明木器
- (8) 鉢



1

2



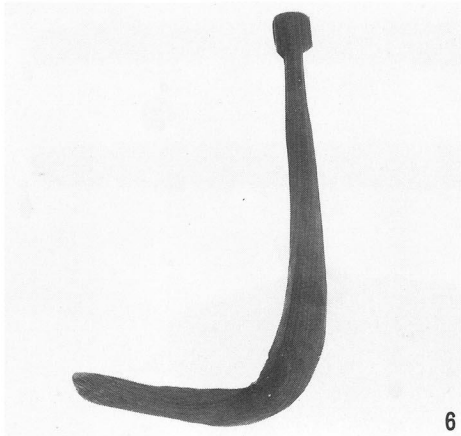
3



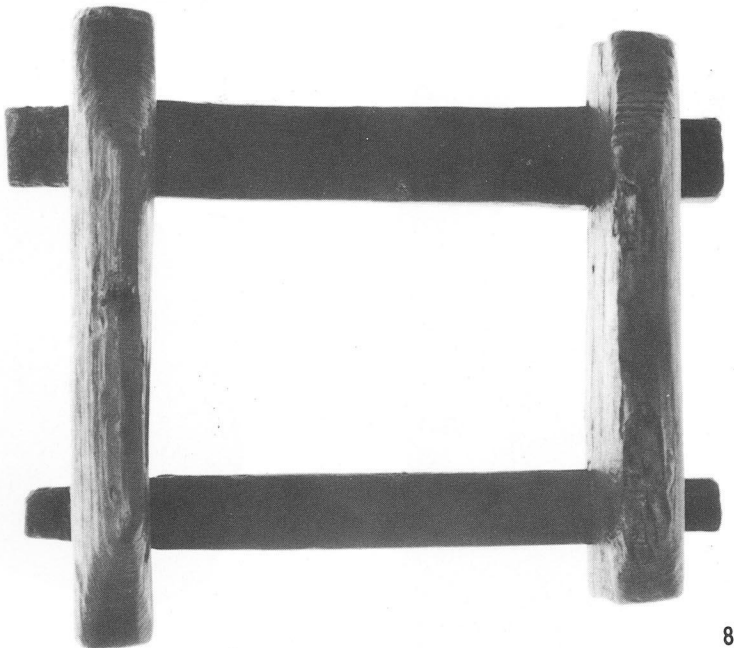
4



5



6



8



7

- | | |
|----------|----------|
| (1) 齋串 | (5) 糸卷 |
| (2) 齋串 | (6) 不明木器 |
| (3) 不明木器 | (7) 不明木器 |
| (4) 不明木器 | (8) 不明木器 |

III 岡宮古墳の調査

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯及び立地

瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査事業の一環として、昭和52年度に陸上部ルート内における埋蔵文化財分布調査が実施された際、角山西麓南端にある岡宮神社（通称）から尾根づたいに約10m登った地点で拳大の河原石が数石かたまって地表に現れているのが発見された。この集石が山林で見つかったことからこれを中心に古墳乃至は直下の神社建立に関連する遺構の存在が予想されたため、岡宮神社裏の地区が発掘調査対象地として登録されていた。当地からは眼下に大東川、その両岸に水田を中心とする坂出市西部、宇多津町南部の田園地帯を見下ろすことができる。大東川対岸には青ノ山が対峙しており、遠くは大麻山・飯の山の山裾まで広がる丸亀平野が一望できる。

角山山麓には横穴式石室を埋葬主体とすると思われる円墳が南東麓で2基、東麓で1基、北西麓で3基確認されている（うち2基は消滅）。東麓では銅鏃が出土したという伝承もある。南麓の1基からは須恵器器台が採集されている。また、昭和44年ごろに作成された遺跡台帳には、南東麓の1基（下川津1号墳）から玉類、鉄剣が出土したとの記録がある。さらに、岡宮古墳より山頂寄りにも円墳が1基確認されている。国鉄予讃線を挟んで北には大規模な前方後円墳として知られる田尾茶臼山古墳がある。さらに角山の南の平地では集落址を中心とする下川津遺跡が展開し、古墳時代後期の集落の存在が確認されており、岡宮古墳との関連に興味をもたれるところである。



矢印が岡宮古墳の位置。
写真中央に下川津遺跡の発掘区
がみえる。

第1図 岡宮古墳遠景

調査は昭和60年2月27日～3月30日の期間で実施した。対象面積は約600㎡，うち調査面積は100㎡である。

2. 調査の概要

調査対象地は、角山山頂より南西に伸びる尾根の先端付近で、標高25m前後のやや傾斜が緩やかな部分にあたる山林で、耕地化された形跡はない。尾根の先端部は神社の境内としてカット、整地がなされている。尾根筋より約15m北側には幅約3m深さ3～5mのクレバス状の水路があり、その対岸は畑地（現状では荒地）になっている。南斜面にはコンターに直交するように伸びる狭い登山道がある。対象地の山頂寄りには畑地化されたところがある。

対象地には墳丘状の高まりは認められなかったが、尾根筋より南側に張り出した部分があり、分布調査で発見された河原石はこの部分の南端に位置している。張り出しより西へ8mほど下ったところにコンターに平行な幅40cmほどの溝状の凹みがあったが、埋土の大半は腐葉土で遺物も認められなかったので、古墳に関連したものではないと考える。

張り出し部分のピークを中心として傾斜に直交する方向に主軸を定めて発掘区を設定した。発掘区西寄りには表土直下に地山が現れた。河原石の集石は、掘り進むにしたがって北西方向へほぼ水平な広がりを見せ、北西寄りではこの石の上面より耳環・提瓶等の出土をみるに至った。

この時点でこの集石が横穴式石室の床面を成していることが判明し、墳丘規模の確認、石室内の精査、石室の構造解明を主眼として調査を進めることにし、本遺跡を岡宮古墳と称することにした。調査の結果、玄室構築のための墓壇の掘り方、床面及び基底部の構造がある程度明らかになった。



第2図 作業風景



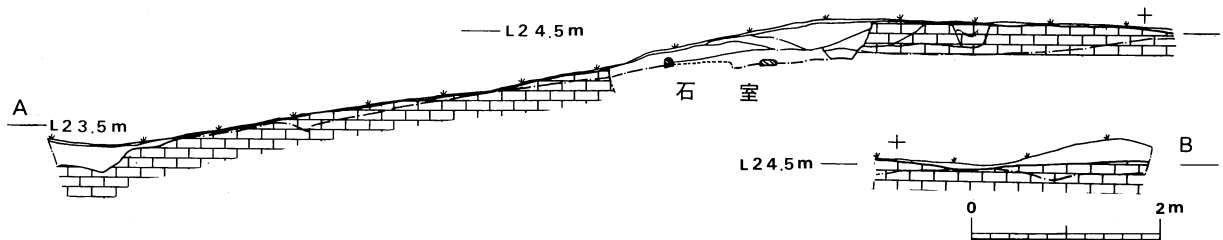
第3図 作業風景

第2章 墳 丘

玄室床面の一部が地表に露出していたという事実で明白なおり、岡宮古墳では墳丘を形成していたであろう盛土は、後世の土砂の流失等のためか全て損われていた。4方向にトレンチを設けたが、石室掘り方内以外では表土直下に地山（花崗岩及び風化土）を検出したのみで、墳丘の規模・形状については不明としか言いようがない。地形の状況、石室の位置等から類推して、小規模な円墳であったと思われる。



第4図 岡宮古墳周辺地形測量図



第5図 石室周辺土層図

第3章 埋葬施設

横穴式石室を埋葬主体としている。遺存状況が極めて悪く、玄室奥壁の基底石が2枚、それも上部と後部が割られている状態で検出したのみで、規模等については正確には測り得ないが、側壁、奥壁の基底石の抜き取り穴の内側を床面の範囲と考え、玄室プランは長方形で、幅1.4m、長さは遺存していた限りで2.8mを測る。羨道部、墓道等はその痕跡も認めることができない状態であった。主軸の方位は、南-52°-東にとり、南東の方向に開口するものであったようである。

遺存しているのが玄室床面の一部のみであるため、石室上部の構造については言及できないが、床面以下の基底部を中心に石室の構造について以下に述べることにする。



第6図 岡宮古墳床面・墓壇掘り方検出状況

掘り方隅丸長方形の墓壇が地山面に掘り込まれている。長辺（東西）は遺存する限りで3.6m、短辺（南北）最大3.0mを測る。北辺東端で掘り方上場が若干南へ曲がる気配を示すことから、この辺が玄門部になる可能性もある。側壁・奥壁の基底石は、抜き取り穴の状況から奥に3石、北に3石、南に2石以上が据えられていたようである。奥壁基底石として残存する2石はいずれも安山岩である。なお、奥壁と北側の側壁にはうら込めの土を入れていた。これには土師器片を含んでいた。

次に床面の構造についてみてゆくことにする。地山を掘り凹めた墓壇の底に黄褐色砂質土（無遺物）を厚さ約10cm張り平らに整地し、その上に石を敷きつめて床を形成するのであるが、岡宮古墳は石敷の方法に特徴を見出す

ことができる。まず、奥壁より1.2mのところ

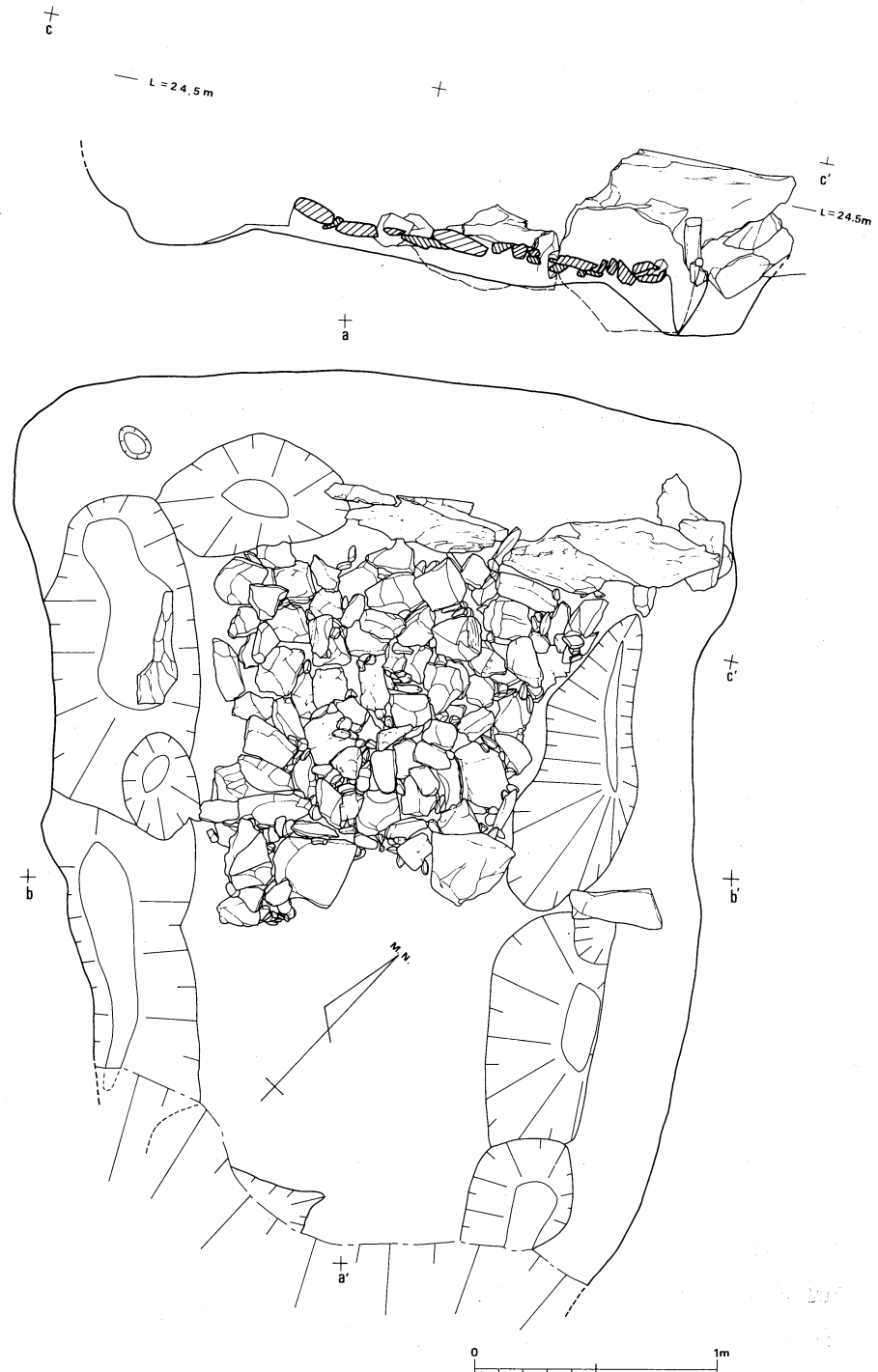
で床面を横断するように人頭大の石を3石配しているのが認められる。

この石列を境界として奥壁寄り

と玄門寄りでは敷石の大きさに差異がみられる。

前者では整地した上に20cm大の安山岩質の垂角礫をくまなく敷きその上に5cm大の小円礫を乱雑に敷いていたが、後者では10cm大の垂円礫を整地層の上に2～3段配しているのみであった。玄門寄りは地表直下に検出され、木の根などによる攪乱を受けているため原位置を保たないものもあるが、比較的整然としており旧状をある程度残すものと推測できる。

垂円礫の上に小円礫もまばらに見られる



第7図 岡宮古墳床面下部実測図

ことから奥壁寄りで見られた小円礫が垂円礫の上に敷きつめられていた可能性も考えられるが、現状で検出した床面のレベルはほぼ一定であることから、玄門寄りには小円礫を施していないものと考えられる。

なお、石敷の下からは排水溝等の施設は確認していない。また、床面の上に人頭大の安山岩質の石を3石検出しているが、明確なプランはもっていない。大きさからみて壁を構成していたものが落下したものと考えている。

第4章 遺物出土状況

石室は基底石まで抜き取られているという状況であったが、床面奥半については比較的遺物の遺存状態が良く、ほぼ原位置を保っているとみて良いと思われる。床面直上で検出した遺物

の分布状況を概観すると奥壁寄りの南側に集中しているのが読みとれる。第9図1～6は、床面をなす敷石の間から出土した。13～16は床面に接して検出した。13には朱の付着した様子が顕著にみられた。鉄鏟(5)鉄片(3)耳環(1)須恵器(14～16)土師器(13)の出土地点をつなぐと長方形を呈し、頭を奥にして棺を安置した様子が窺える。なお、石室玄門寄りでは床面より10cm程上から土師質土器碗(8)を検出しており、中世頃に石室を二次的に利用した可能性を考えることができる。

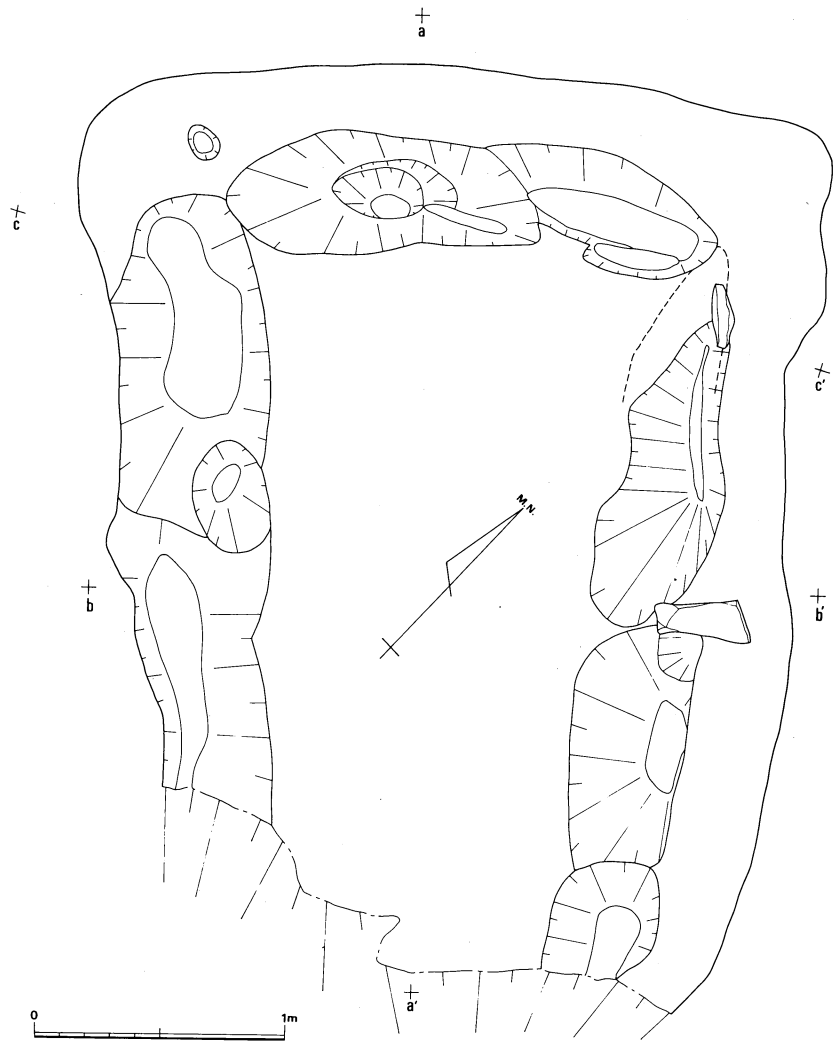
第5章 遺物

石室床面、埋土及び抜き取り穴付近より土器、装身具及び鉄器が出土している。うち14点を図化した。

1. 土器

須恵器高杯(第9図14, 第10図1)

石室床面より1点の出土をみた。長脚二段透しで杯部にたちあがりをもたないものである。透孔は長台形で2方向から施されている。上段は2ヶ所とも未貫通である。脚端部は杯身のたちあがりを連想さ



第8図 岡宮古墳基底部平面図

せるようなシャープさをもつ。

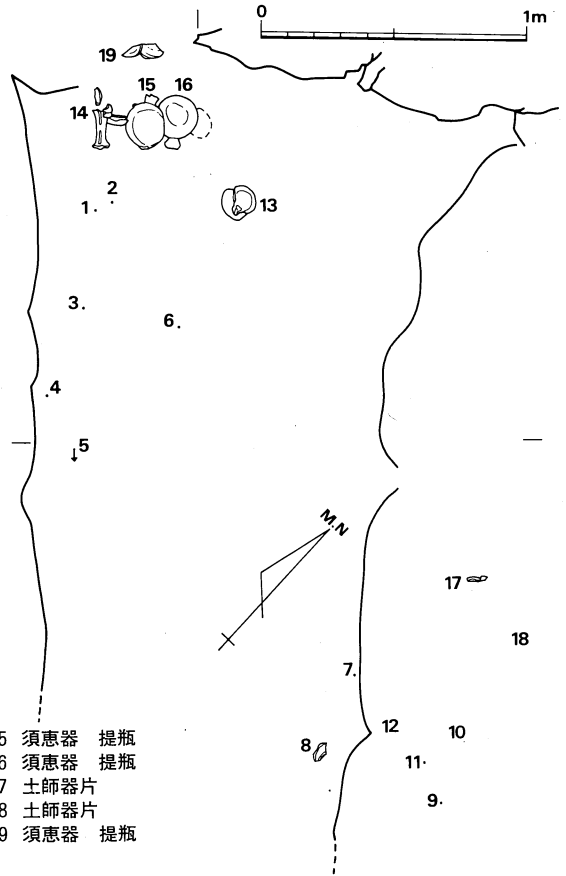
須恵器杯身（第9図12，第10図5・4）

5・4ともに原位置は保っていないが古墳に伴う遺物と考える。いずれも口径10cm前後器高約3cmの小型のものである。

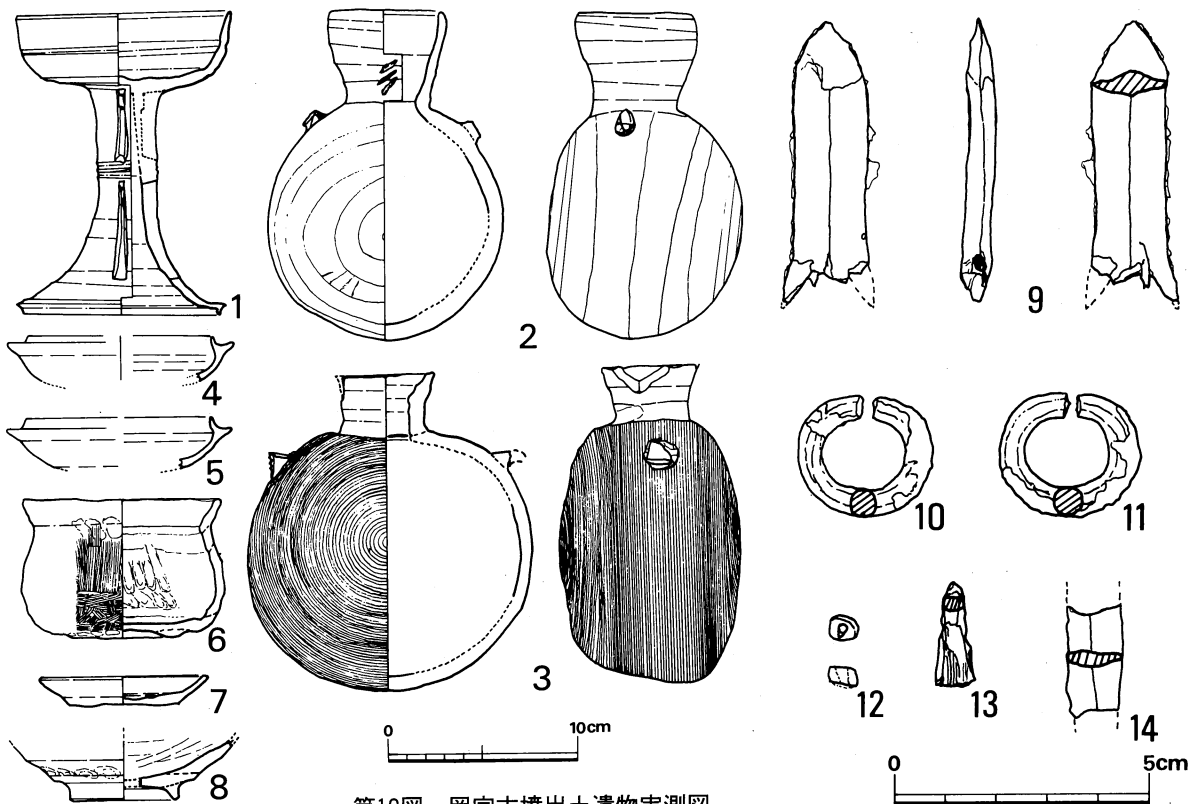
須恵器提瓶（第9図15・16・19，第10図3・2）

奥壁寄りの床面から3点出土している。うち第10図19は体部の破片のみで，原位置を動いているものと思われる。第10図3は体部外面に明瞭なカキ目が認められる。体部正面から見るとほぼ正円になる。口縁端部はしっかりしており，面をとっている。把手は破損しているが，カギ状を呈していたと思われる。2は体部外面にヘラ削りの上からナデ調整を施すのみで，カキ目は認められない。口辺部にヘラ記号がみられる。把手はボタン状のものを貼り付けたものである。

- | | | |
|-----------|------------|----------|
| 1 耳環 | 8 土師質土器椀 | 15 須恵器提瓶 |
| 2 須恵器杯身片 | 9 土師器片 | 16 須恵器提瓶 |
| 3 鉄片 | 10 土師器 | 17 土師器片 |
| 4 鉄片 | 11 土器質土器小皿 | 18 土師器片 |
| 5 鉄鏃(切先南) | 12 須恵器杯身片 | 19 須恵器提瓶 |
| 6 耳環 | 13 土師器壺 | |
| 7 須恵器杯身片 | 14 須恵器高杯 | |



第9図 遺物分布状況



第10図 岡宮古墳出土遺物実測図

土師器壺（第9図13，第10図6）

石室床面よりほぼ完形のもものが1点ある他は破片が数点散見されたのみである。第10図6は口径10.6cm，器高7.4cmと小形のもので，底部に高台状に粘土を貼り付けてある。

土師質土器（第9図8，第10図7・8）

中世の遺物が数点出土している。第10図8は椀で内面に板ナデが認められる。7は小皿で底部へラ切りである。

2. 鉄器（第9図3～5，第10図9・13・14）

床面より鉄鏃の他器種不明の鉄片が数点出土している。鉄鏃は本体に鑄をもち断面ひし形を呈する。なかごの根元に短い逆刺をもち，なかごは殆ど折損している。この他は小片ばかりで器型等は不明である。

3. 装身具（第9図1・6，第10図10～12）

耳環……床面の小礫に挟まるような状態で緑錆におおわれたものを2点出土した。長軸2.6cm，短軸2.4cmの扁平な円形を示す。銅芯に金メッキを施したものである。断面は直径5mmの円形を呈するが，外側と内側に面をとっている。

玉類……石室内の埋土中より滑石製の白玉が1点出土している。検土中に見出したもので，出土地点等は不明である。高さ3mm，直径6mmを測り，片側から穿孔している。

第6章 まとめと考察

岡宮古墳の調査結果を以下に列挙する。

- ① 墳丘については形状・規模ともに不明である。
- ② 埋葬主体は横穴式石室で主軸を南-52°-東にとり，南東方向に開口していたものと推定できる。
- ③ 玄室プランは長方形を呈し，残存していた限りで長さ2.8m幅1.4mを測る。
- ④ 羨道部及び玄門部については遺存しておらず，不明である。
- ⑤ 床面は二重に石敷きを施している。下位の石敷きは上位のものより大きな石を使用しており，石室奥半のみに見られる。側壁等が全く残っていないため，上部構造については言及できないが，床面の構造をみる限りでは，玄室を分割するという概念が古墳築造当時の人々の意識の中にあったとも考えられる。この点については後で県内の類例についてふれることにする。
- ⑥ 遺物は須恵器・土師器・鉄鏃・白玉・耳環等を出土している。
- ⑦ 石室内の遺物の出土状況から，被葬者は，玄室奥南寄りに北東を頭にして安置されたとの推測が成り立つ。
- ⑧ 年代については，杯身，高杯の形態が中村氏の編年でⅡ型式5段階^①に比定できると思われることより，6世紀末頃の築造と考えられる。なお，提瓶については図化した2点の間に形態の差異が認められるが，調査では追葬の形跡は認められておらず，一時の埋葬に伴うものとする。

さて，本墳では先にもふれたとおり，床面の石敷きに特徴を見出すことができる。

即ち①玄室内を仕切石（本墳の場合は3石1列で他の敷石とは大きさに際立つものを用いている）で奥寄りと玄門寄りに分割していることと②床面の石敷きが二重構造になっていることの2点である。

県内において石室基底部分までに及ぶ最近の調査例は、管見によれば23例ある。上記の2点に着目して、床面の構造のみからみた本墳との類例としては下表の8例が挙げられる。

表の項目について少しふれておく。床面の項の中の「敷石」の欄には床面の石敷きの枚数を表した。「上・下」の上は上面、下は下位の面である。「分割」の欄には玄室内をどのような比率で区切っているかを比で表した。左が奥壁寄り、右が玄門寄りである。斜線は「無し」を意味している。

番号	遺跡名	所在地	玄室			床			面		排水溝	時期
			プラン	長さ(m)	幅(m)	敷石	分割	石の大きさ等 (奥寄り) (玄門寄り)	仕切石			
1	黒島林6号墳	観音寺市	胴張りの両袖	3.05	(奥) 1.7 (中央) 1.8 (前) 1.4	3層	上 下	上 砂利土 中 やや大きめの砂利 下 中位と同大の砂利				—
2	黒島林8号墳	観音寺市	胴張りの右片袖	3.4	1.4~1.6	2重	上 下	1:1 上位 玉砂利 玉砂利 2:1 下位 20cm大の礫 玉砂利	中央に 20~30cm大			6C後半 ~7C
3	上母神4号墳	観音寺市	胴張りの右片袖	2.0	(奥) 1.35 (最大) 1.45 (前) 1.2	2重	上 下	玉砂利 粘土 1:2 玉砂利 20cm大の円礫				6C後半 ~末
4	財田2号墳	豊中町	右片袖	4.5	1.1~1.2	2重	上 下	1:1 20cm大の石 玉砂利				6C末 ~7C
5	岡田井古墳	綾南町	右片袖	2.0	1.8	1重	3:1	玉砂利 石敷なし		有		6C末
6	浦山5号墳	綾南町	両袖	1.6	2.0	1重	1:1	30~50cm大の角礫 玉砂利				—
7	真伏古墳	坂出市	右片袖	2.8	2.0	2重	1:1	サヌカイト小礫 人頭大サヌカイト 石敷なし		有		6C後半
8	緑塚10号墳	大野原町	両袖	3.0	(奥) 2.0 (前) 1.6	2重	上 下	玉砂利 1:3 20cm大の礫 30~50cm大の石	中央に やや大きめの石			—
9	岡宮古墳	坂出市	不明	(2.8)	1.4	2重	上 下	1:1 玉砂利 10cm大の 1:1 20cm大の角礫 亜円礫	中央に 人頭大			6C末

表1 横穴石室玄室類例一覧

表にあらわした順序に従ってそれぞれの床面の構造について若干の説明を加えると、

黒島林6号墳の床面は3層で構成されているが、大まかにみて小礫混じりの土から成る上面とやや大きめの礫から成る下面の二重構造とみてよからう。

黒島林8号墳は丁寧な床面の敷石が特色である。ここで目をひくのは上面にみられる仕切石の存在である。さらに上面下位には奥より3層まで上位より大きめの石を敷くという構造は本墳とたいへん似かよったものであると言える。(第11図参照)

上母神4号墳では下面の敷石が上面より大きく整然としており、奥から60cmに小礫、それより前寄りには20cm大の石を配していることに特色が見出せる。また、下面の敷石は玄室の根石の上に貼った粘土より下にあったことも注目される点である。(第12図参照)

財田2号墳は仕切石がないこと以外は本墳と酷似した床面構造を呈している。但し、玄室プランは細

長く、本墳とは異なるようである。

岡田井古墳は敷石が一重で玄門寄りで石のない部分があるということらしいが、詳細については不明な点が多い。

浦山5号墳は長さよりも幅が広い玄室をもつ。敷石は一枚であったらしい。実測図からは奥半に50cm大の石を敷き、手前に小礫という床面構造であることが読みとれる。

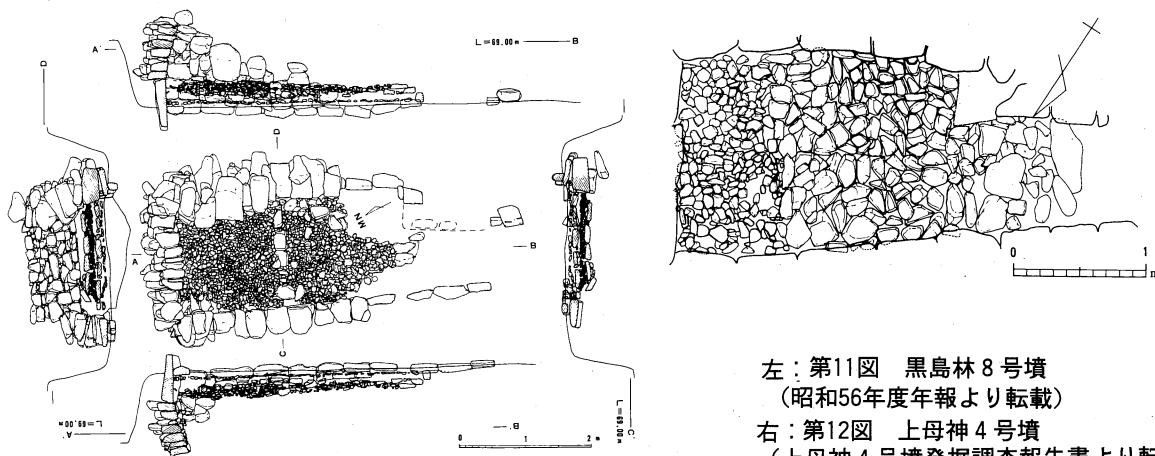
真伏古墳は奥半のみに二重の敷石が施されている。これも上が小礫、下が人頭大の礫というもので、城山北西麓という場所柄か、用材はすべてサヌカイトである。また、真伏古墳には石で蓋をした素掘りの排水溝がある。

縁塚10号墳も二重の敷石で、上に小礫、下に30~50cm大の石という構造である。上母神4号墳ほど明確ではないが、下面に奥寄り前寄りで石の大きさに差異があるように思える。

以上床面の構造のみに着目して岡宮古墳の類例についてみてきたが、ここでこれらの特徴としてきた床面構造の2つの着眼点についての疑問点と課題を述べることにする。

まず、敷石を二重に張る点について、①追葬等に伴って上下両面が埋葬面として使用された可能性はないか。②下部に大きめの石を用いることは、排水あるいは湿気ぬきを意図したものではないか。という疑問、仮説が浮かんでくる。これについて、①に対しては、上母神4号墳の調査報告によると、上下両面の間に介在する粘土層が玄室の根石の上へかぶっており、その上から壁を構築していること、下面からは遺物・埋葬の痕跡ともに見出せなかったことより下の面は未使用と判断している。また、同書では黒島林6号墳についても同様の判断を下している。財田2号墳の調査でも担当の大山氏の御教示によれば、①の疑問にのっとなって下部敷石面を入念に精査するも遺物の出土は皆無であったとのことである。本墳においても同様の結果を得ている。さらに、縁塚10号墳の場合は、調査担当の中西氏の御教示によると遺物の出土状況から追葬もしくは埋葬儀礼の可能性はあるが、下部面での埋葬の痕跡は認められていないなど、①については否定的見解が多数を占める。②については各報告でも触れているなど、説得力のあるものと考えられるが、上母神4号墳のように下部面で石の大きさが変化するもの、財田2号墳のように下部面が奥半にしかないもの、本墳のように仕切石のあるものといったバラエティーを単に湿気ぬきのみで説明できるのかという疑問が残る。また、真伏古墳にみられるように排水溝の上に二重の敷石を施すといったものもあり、排水・湿気抜きと簡単には割り切れないものと思われる。

次に、石の大きさを変えとか、仕切石を設けるなどして玄室内を意識的に分割するということにつ



左：第11図 黒島林8号墳
(昭和56年度年報より転載)
右：第12図 上母神4号墳
(上母神4号墳発掘調査報告書より転載)

いては、棺床としての機能が考えられはしないかという点が指摘できよう。棺床が顕著に認められるものとして、高松市西春日町所在の南山浦古墳群が挙げられる⁽²⁾。13号墳の棺床を例にとって説明すると、20cm大の礎石を敷いた床面上に側壁に沿って主軸に平行な長方形を棺台状に置かれた礎石で囲んで作り、その範囲内に小円礫を敷きつめる、というものである。これと本墳やその類例に挙げた古墳の床面の仕切り方とを比較してみると、前者が玄室という空間の中に台状のものを置くという意識のもとに築かれているのに対して、後者は空間そのものを区切るという意識が働いている印象が強い。本墳では遺物の出土状況から仕切石で棺床を画していたとは考えにくく、規模等からみて他の類例についても同様であると思われる。石室内の分割について未だ明確な意味づけは成し得ないが、このことについては、『石室内を分割する意識の底流に複室構造があるのではないか』⁽³⁾といった見解が示されていることを付け加えておく。

以上、床面の二重構造について、その要因を①追葬時の敷き直し ②排水または除湿に求めることができないかという点と、床面を意識的に分割することについて、棺床を意味するのではないかという点で、それぞれ検討を加えてきたが、本墳やその類似として挙げた古墳のもつ床面構造にみられる2つの特徴について、その意味づけを与えるにはまだ課題が多いようである。

ここで、今一度一覧表に目を移し、2つの特徴をもつという現象の地域的なひろがりを見てみると、1～4及び7～9は床面が二重になっているもので、2～9は床面を何らかの形で奥寄り・前寄りに分割しているものである。(但し、黒島林6号墳では床面以外の側壁の積み方に奥寄りで変化がみられ、何らかの分割を意図したのではないかとされている⁽⁴⁾。)両方の特徴を備えるものは2～4及び7～9ということになる。即ち、玄室の構造にこれら2つの特徴を備える古墳は今のところ三豊地区と坂出地区にしか見ることができない。

三豊地区における例として挙げた4つの古墳のうち、黒島林8号墳と上母神4号墳は、三豊平野のほぼ中央部にある独立丘陵、母神山に立地する母神山古墳群に属するものである。母神山古墳群は千尋神社支群、下母神支群、上母神支群、黒島林支群の4支群によって形成され、それぞれの支群ごとに配置・石室構造等で特色がみられる。中でも黒島林支群と上母神支群の各古墳は、胴がやや膨らむ玄室をもち、敷石が二重構造であるものが多いという点で特徴づけられている⁽⁵⁾。『胴張り』の玄室については、その他の特色とあわせて北部九州からの影響が示唆されている⁽⁶⁾。先述した複室構造についても北部九州に多い石室形態であると言われている。

複室構造をもつ古墳としては、母神山古墳群の盟主墳的存在として知られる鐘子塚、三豊平野有数の巨石墳である椀貸塚が挙げられる。

坂出地区でも比較的大規模な新宮古墳が、複室的な構造をもつ横穴式石室を主体とするとされており、真伏古墳・本墳のもつ三豊地区の古墳との類似性とあわせると、三豊・坂出両地域の後期古墳のあり方に接点を見出したことになる。本墳にもみられた玄室内の分割と複室構造との関連が強いとなれば、上記の事例と照らし合わせて考えるとさらに興味深いことになってくる。

角山山麓では、現在後期古墳とされる古墳を7基確認しており、そのひとつである本墳が大東川を挟んで対峙する青ノ山古墳群とは異なった石室プラン⁽⁷⁾・構造をもち、なおかつ三豊方面に類例を求めることができる点は、眼下に広がる集落址を中心とした下川津遺跡の古墳時代後期における集団の性格等を考えて行く上でも注目すべきものとなる。

(松野)

〈表1作成にあたっての参考文献〉

- 1 黒島林古墳群発掘調査団 「黒島林第5・6号墳調査報告—香川県観音寺市母神山所在の後期古墳の調査」 1977『香川県埋蔵文化財調査報告』 香川県教育委員会
 - 2 斎藤賢一 「黒島林7・8号墳」 1982『香川県埋蔵文化財調査年報』 香川県教育委員会
 - 3 上母神古墳群発掘調査団 1978『上母神第4号墳発掘調査報告書』 香川県教育委員会
 - 4 大山真充・池内右典 「財田古墳群の調査」 1984『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告』 香川県教育委員会
- 尚、表1作成にあたっては、大山真充氏のご教示をいただいた。
- 5 香川県教育委員会「岡田井古墳」 1983 『新編 香川叢書 考古編』
 - 6 香川県教育委員会「浦山古墳群」 1983 『同上』
 - 7 廣瀬常雄・六車 功 「真伏古墳」 1979『香川県埋蔵文化財調査年報』 香川県教育委員会
 - 8 内部資料による。尚、表の作成及び本文について本例は未発表資料であるが、調査担当の中西昇氏のご厚意により掲載させて頂いた。

〈引用・参考文献〉

- (1) 中村 浩 「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』1978 大阪府教育委員会
- (2) 上記文献「3」に同じ
- (3) 『南山浦古墳群調査報告書』1985 高松市教育委員会
- (4) (2)で真鍋昌弘氏が指摘された。
- (5) 上記文献「5」に同じ
- (6) 上記文献「1」で渡部明夫氏が他の要素にもふれながら指摘されている。
- (7) 青ノ山には30~40基を数えるといわれる古墳群の存在が知られている。6号墳・8号墳のように石室プランが「L字型」をもつものがあり、古墳群に伴う社会集団の特質について研究していく上での重要な遺跡であるとされている。『青ノ山8号・9号墳発掘調査概報』—香川県丸亀市青ノ山山頂所在の後期、終末期古墳—1984 丸亀市教育委員会にて東原輝明氏が青ノ山古墳群の特徴についてまとめられている。

尚、本章拙稿執筆にあたっては、調査担当、文化行政課専門職員の方々のご指導、ご教示をいただいた。

挿図番号	図版番号	出土層	器 種	法量(cm)	色 調	胎 土	焼成	形 態 及 び 手 法 の 特 徴	
				A 口 径					B 器 高
第10図	図版3 -1	床 面 Na14	須恵器高杯	A 11.8	灰色 外面の自然釉の 部分は黄緑灰色	1mm以下の砂粒を含む	良好	杯部は歪んだ円形。透しは台形2段で表裏2ヶ所に施されている。但し、上段については未貫通。脚端部はかなりシャープで杯身の立ち上がりを選ませる。また沈線の間にヘラ沈線状の凹みがある。全体に回転ナデ・杯部外面下位については回転ヘラ削り。外面全体に自然釉。	
				B 16.2					
	-2	図版3 -2	床 面 Na16	須恵器提瓶	A 5.9	灰色 上半部に灰がか かっている。	1mm以下の砂粒を含む	良	頸部にヘラ記号が3状みられる。口縁内部は横ナデ。外部はナデ。体部については回転ヘラ削りの上から仕上げナデの調整が施されている。体部中央より下部にヘラの止まった跡がみられる。
					B 17.6				
	-3	図版3 -3	石室埋土 Na15	"	A 4.0	暗灰色	1mm前後の黒色の砂粒を含む	良好	口頸部は、体部に穴をあけた後、接合しており、外面で接合部分が凹んでいる。口縁部は横ナデ。端部は面取りされている。体部外面は、カキ目(原体幅0.8cmで平均5条が施されており、円板貼り着け部分の一部に指頭圧痕が残る。
					B 16.8				
	-4	/	床 面 Na17	須恵器杯身	A(10.0)	明灰色	1mm前後の細かい砂を含む	良好	法量A、Bは復原可能な点から推定される大きさである。破片の内外面は横ナデ。
					B(3.0)				
-5	/	表土層	"	A(10.0)	明灰色	微砂粒をわずかに含む	良好	法量A、Bは復原可能な点から推定される大きさである。破片の内外面は横ナデ。	
				B(3.0)					
-6	図版3 -4	石室埋土 Na13	土師器 壺	A 10.6	赤褐色	やや粗い 5mm大の砂粒を含む	良好	口縁部外面ナデ。内面は調整不明、但し、朱がみとめられる。頸部には口縁を接合した痕がみられる。体部内面には指ナデが施されており外面は、体部中程まで、縦状のヘラ。下部は不定方向のヘラ調整がみられる。底部には粘土が高台状に貼り付けられており、指頭圧痕がみられる。	
				B 7.4					
-7	/	Na11	土師器 皿	A 9.0	明黄褐色	1mm以下の微砂粒をわずかに含む	良好	内外面、ナデ調整。底部はヘラ切りで、板目が残る。内底面に仕上げナデが施されている。	
				B 2.1					
-8	/	床面検出中 Na18	土師質 碗	高台径 約 7.4	明黄褐色	精緻 高台部分は1mm以下の 粒子が多く含まれる	良好	高台は粘土紐を貼り付けたもので、内外面を丁寧にナデている。高台部分と体部外面は横ナデ、体部内面は板状のもので仕上げナデが施されている。	

表2 岡宮古墳出土土器観察表

版 图



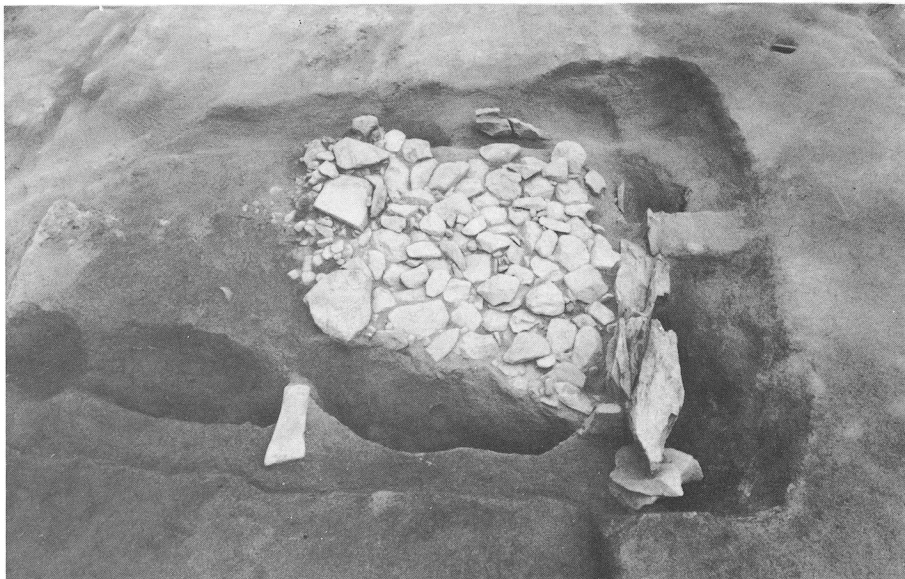
(1) 発掘前風景



(2) 床面検出状況



(1) 掘り方及び床面
検出状況



(2) 基底石抜き取り穴及び
床面下部構造



(3) 墓拵基底部